

# 『高圧ガスの保安心得 2026』導入の経緯

— 2024 年度保安講習会アンケートが示した課題に対して —

## はじめに

2024 年度、全国 31 組合中 28 組合から提出された保安講習会実施レポートは、全国で計 51 講習・5,814 名が受講したことを示しています。数字の上では順調に見えますが、各組合から寄せられた声は、現在の保安講習会が抱える本質的な課題を浮き彫りにしていました。

本資料は、アンケートが示した課題を整理し、ひとつの回答として『高圧ガスの保安心得 2026』が作られた経緯を提示するものです。

## 第 1 章 アンケートが示した課題の構造

### 1-1 表面に現れた要望

各組合から寄せられた改善要望を整理すると、以下の三点に集約されます。これらは現場で講習を支える皆様  
が、限られた資源の中で「受講者に届く講習」を模索し続けた結果、突き当たっている切実な壁の現れです。

- 動画・映像資料の充実: スマホや SNS の普及により視覚情報に慣れた受講者に対し、言葉だけの説明で関心を繋ぎ止めることの限界が、現場での強い動画ニーズを生んでいます。
- 教材印刷費の高騰: 予算の約 35% を占める印刷費は、組合運営の持続可能性を脅かす直接的なコスト課題となっています。
- 内容の難解さ・受講者との関連性の薄さ: 法改正などの専門的な内容を、いかにして立場の異なる個々の受講者の「自分事」として落とし込むかという、教育の質に関する根本的な悩みです。

これらの要望は、決して単なる「手法の改善」を求めているだけではありません。その背後には、「どれだけ工夫を凝らしても受講者が受動的な状態から抜け出さない」という、現在の講習形式そのものが抱える深い閉塞感がありました。動画を足し、コストを削るというこれまでの対症療法的なアプローチでは、もはやこの構造的な問題を打破できない段階に達しているといえます。

### 1-2 根本にある二層の問題

#### 【第一層：受講者に届かない講習】

受講者の多くが受動的な状態で着席し、15~20 分という人間の集中力の限界に直面します。この問題は話術や教材の工夫で解決できるものではなく、受講者が「なぜここにいるのか」という意味づけを持っていないことに起因しています。

ここで重要なのは、従来の教育が採ってきた手法の限界です。動画による注意喚起は瞬間的な覚醒をもたらしますが、その効果は一時的であり、「眠らせない間に何を伝えるか」という本質的な問いへの答えにはなりません。また、過去の運転免許更新時の事故ドラマのような脅しストーリーも、感情を揺さぶる力があります

が、時間とともに風化します。恐怖や驚きを与えることと、行動変容を促すことは別の問題なのです。

### 【第二層：優れた手法が全国に広がらない格差】

各組合が個別に工夫を重ねているにもかかわらず、その知見が共有されず、全国的な水準の底上げにつながっていません。特に講師の問題は深刻で、監督官庁から2~3年で部署を異動する若い担当者が講師を務めることも多く、高圧ガスの危険性を十分に理解しないまま講習に臨まざるを得ない状況があります。こうした構造的な制約の中で、個々の講師の努力に依存するアプローチには限界があります。

## 第2章 『保安心得2026』の設計思想

---

### 2-1 知識の伝達より「動機の転換」へ：認知的不協和の活用

本資料は、単なる知識の伝達を目的とせず、受講者の内面で「動機の転換」が起こるための装置として設計されています。

- 認知的不協和による覚醒: 冒頭の「スコップ・殺傷用刃物・拳銃」の問いかけは、直感的な恐怖と歴史的事実の矛盾を突きつけることで、受講者の脳内に「認知的不協和」を生じさせます。
- 「問い」の持続: 正解をすぐに与えず、自ら考えさせることで、「未完了の事柄をより強く記憶する」というザイガニック効果を誘発し、講習後も保安への関心を維持させます。
- 実感を伴う気づき: 教えられた知識ではなく、自分自身で「知らない危険があった」と気づくプロセスを辿るため、その意識は風化しにくいものとなります。

### 2-2 「受け売り」を最終目標とする設計：情報伝播の心理学

本資料が目指すのは、受講者が「あの話、聞いてくれ」と周囲に語り出す状態です。

- 社会的証明としての「受け売り」: 「餅で死ぬ人より高圧ガス事故死より極端に少ないのは、厳しい規制があるから」「ボンベは外来語ではなく、爆弾のように危ないという意味で付けられた日本でしか通じない言葉」「酸素が充填されているエネルギーは大仏殿からクラウンが地面に落ちたときの力」「でも普通はその圧エネルギーに人間は気付けない」「年に一度の保安教育というのは、設備の保安検査同様の『心のメンテナンス』の時間」「ガス切断機が実用化される直前にボンベと溶断セットを盗んだやつが、ヨーロッパで大金庫破りをやったらしい、昔から悪いやつはこれを盗んで悪事に使おうとしてたんだ」「『愛の反対は憎しみではなく無関心』ってマザーテレサの言葉じゃないらしいぞ」といった話は、受講者の脳内に発生した「認知的不協和」から、受講者自身が「自ら発見した真理」として誰かに話したくなるように設計されています。
- 内発的動機の共有: 人は他者から強制されたルールより、自分が納得して得た知恵を語りたがる性質を持っています。この「受け売り」が職場に広まることで、講習に参加していない層へも自然な形で保安意識が伝播します。

## 2-3 段階的情報開示による多層的システム

本資料は、説明のために説明するのではなく、物語や文脈の中に情報を溶け込ませる「アンフォールド・ピープル（段階的情報開示）」の手法を採用しています。

### 【第一層：講習の場】

動画やプレゼンが「引っかけり」としての伏線をまき、講師の一言がそれを受講者に意識させます。

### 【第二層：資料（保安心得）】

表紙や挿絵が「違和感」を生み、本文やコラムを読むことで違和感が「確信」へと変わる設計です。

### 【第三層：動画リスト（QRコード）】

興味を持った受講者が自律的に学びを深める場を提供し、能動的な学習体験を完結させます。

## 2-4 多様な立場に応える「多機能装置」としての設計

本資料は、講習に関わるあらゆる立場の人間に対し、それぞれの課題を解決する価値を提供できるよう設計されています。

- 熟練講師に対して：高度な話術に頼らずとも、資料が「気づきを引き出す装置」として機能するため、講師は受講者の反応を観察し、場をコントロールすることに専念できます。

経験の浅い講師に対して：話す内容と順序を明確に示す「ガイド」として機能します。それと同時に、資料に沿って講習を進めるプロセスそのものが、講師自身が高圧ガスの物理的脅威や法規制の意味を十分に追体験し、講師としての専門性を再認識するための「自習教材」としての役割も果たします。

- 主催者に対して：既存の講習カリキュラムにそのまま組み込める実用的なレジメとなり、独自教材の作成によるコストや負担、講師の質のバラつきに起因する運営リスクを低減します。

- 受講者に対して：講習中だけでなく、家庭や職場で「後から我が意を得たり」と読み返せる読み物として機能し、長期的な行動変容を促します。

- 熟練講師に対して：高度な話術に頼らずとも、資料が「気づきを引き出す装置」として機能するため、講師は受講者の反応を観察し、場をコントロールすることに専念できます。

経験の浅い講師に対して：話す内容と順序を明確に示す「ガイド」として機能します。それと同時に、資料に沿って講習を進めるプロセスそのものが、講師自身が高圧ガスの物理的脅威や法規制の意味を十分に追体験し、講師としての専門性を再認識するための「自習教材」としての役割も果たします。

- 主催者に対して：既存の講習カリキュラムにそのまま組み込める実用的なレジメとなり、独自教材の作成によるコストや負担、講師の質のバラつきに起因する運営リスクを低減します。

- 受講者に対して：講習中だけでなく、家庭や職場で「後から我が意を得たり」と読み返せる読み物として機能し、長期的な行動変容を促します。

## 第3章 導入の実現可能性

---

### 3-1 継続的な信頼の蓄積を基盤として

『保安心得』は2018年頃から版を重ね、全国の組合に継続採用の実績があります。その信頼の蓄積が、2026年版の受け入れ基盤となっています。資料が変わっても講習という場の構造は変わらないため、新版への移行は自然な流れとして受け取られやすいと考えられます。

また、組織の中で講師役を引き受ける立場にある方々にとって、「話す内容と順序が示されている資料」は心強い支えとなります。その意味でも、本資料の導入は講師側にとっても歓迎されるものと考えられます。

### 3-2 段階的な活用を想定する

最低限でも資料が受講者の手に届きさえすれば、最初の一ページが自動的に引っかかりを生みます。動画・パワーポイントとのセット導入はその上位の活用であり、各組合の状況に応じた段階的な普及を想定しています。

## 第4章 今後の検討課題

---

保安委員会として継続的に検討すべき課題を以下に示します。

- ・ 動画・パワーポイントとのセット提供の体制整備
- ・ 全国組合への普及促進
- ・ 主催者側への「保安心得2026」の活用事例（指導）
- ・ 受講者評価のフィードバックと再評価

## おわりに

---

アンケートが示した「動画がほしい」という声の背後には、「受講者が能動的に参加しない講習への根本的な閉塞感」がありました。動画は確かに瞬間的な覚醒をもたらしますが、それだけでは行動変容には至りません。脅しのストーリーも、感情を揺さぶる力がありますが時間とともに風化します。

『保安心得2026』は、これらの対症療法に代わるものとして、知識の伝達よりも動機の転換を重視した設計になっています。その最終的なねらいは、受講者が自ら語り出す「受け売り」によって、講習会の場を超えた保安意識の伝播を生み出すことにあります。

「不思議な無事故はあるが、不思議な事故はない」——保安教育の効果もまた、偶然ではなく設計の結果として現れるものです。本資料がその設計の一端を担えるよう、委員会での忌憚なき議論を期待しております。